

造形計画2B_2018【風景への垂直的アプローチ】

風景を構成するものを「さまざまな起伏をたどる道」と捉え、西国三十三所巡礼を参照しながら、京都芸大内にもうひとつの巡路を設定し、新しい風景の創出を試みる。
札所として下の12箇所が設定された。

京芸十二箇所

- 第一番札所：はかり神
- 第二番札所：覚ゆの場見（おぼゆのばみり）
- 第三番札所：鳥居神社
- 第四番札所：京の橋立（きょうのはしだて）
- 第五番札所：穴ぼこ道
- 第六番札所：茶庭
- 第七番札所：土の橋跡と沓掛展望台
- 第八番札所：御神木（ごしんぼく）
- 第九番札所：夫婦管（めおとくだ）
- 第十番札所：つちのいえ
- 第十一番札所：焼竹跡（しょうちくあと）
- 第十二番札所：鏡迎湖（きょうげいこ）



巡礼には白装束、数珠などの「持ち物」が必要ですが、京芸12箇所巡りで、唐揚げチキン等を入れるオレンジと白のカップが必需携帯品となります。

小林優介
小原 唯
中村日奈子
早川美月
馬場まゆみ
進士三紗
加護野萌



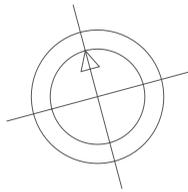
造形
計画
2018

雪舟『天橋立図』（国宝）

背景の山の中腹に西国三十三所第28番 成相寺がある

京芸十二箇所巡り

これら十二箇所を巡礼参拝すると、芸術的に極楽往生できます？



●九番「夫婦管」

その昔、この場所には音の神・色の神が祀られた祠が存在した。二神は夫婦神と呼ばれ厚く信仰されていたが、いつしか人々は彼らのことを忘れ、祠も山に埋もれてしまった。

ある時、夫婦神のことを知った者がこの地に芸術の学校を作ろうとした。祠を掘り出すと、再び人々に拝まれた夫婦神は喜び、この土地に芸術の祝福あれと行って地に消えていった。

祠は今は存在しないが、神々が地に潜った伝承からここには2つの道が作られた。それが夫婦管である。

●十番「つちのいえ」

この地の先住民である「ツッチー族」の住居兼教室。彼らは新住民の強欲にあふれた丘の下を「ゲカイ」と呼び、ゲカイの人々と安易に交わろうとしない。近年、丘の斜面に「土浮庵(つちうきあん)」という入口がわかりにくいロフト付の小屋をつくった。

●八番「御神木」

巨大なその姿から、この地の守護神が宿るとして信仰を集めてきた樹。地を守る者には恵みを、害をなす者には天罰を与えるとされている。

●一番「はかり神」

百葉箱のかたちをした祠で、この地の温度・湿度をひそかに測り、ときに狂わせる。地の安寧と混乱を図るため、第一番札所となった。ここで巡礼地図が入手できる。

●二番「覚ゆの場見」

神代から残る過去と未来がのぞく穴。その昔、神器を納める場所を見てわかるようにするために印されました。記憶力にご利益があります。まず任意の自分の持ち物を枠に充て、それがピッタリと取まれば、あなたの忘れ癖が治るとされています。

●十二番「鏡迎湖(きょうげいこ)」

ここは最後に身体を清め奉納する場である。“鏡のように写す”と奉納者を向かい入れる場“という意味を合わせて鏡迎湖と呼ばれている。この池に写る水面はこの芸大のキャンパスや歴史、その時々の風景であり、それと同時にこの池の奥深くの地層と交わっている。

●七番「土の橋跡と沓掛展望台」

かつてここにはコンクリートの海に囲まれた島から島へと渡る土製の橋があった。橋を渡ると正面に沓掛の地を見渡せる高台があり、撮影スポットとなっている。現代では橋の大部分が地下へと沈み、その名残が見られるのみである。

●六番「茶庭」

かつてゴミ捨て場だった場所を「ニワの神」が美しい庭につくりかえた。今も週に一度、「ニワの神」は苔山の養生に訪れ、人知れず茶をたしなんでいると言う。ここにゴミを捨てると、住まいがたちまちゴミ屋敷と化すとされる。

●十一番「焼竹跡(しょうちくあと)」

かつて、この地一帯には竹藪が広がっていた。竹で生計を立てる民たちは、竹林に神が宿るとして崇め奉ってきた。ところが、余所者が土地を得るため、竹林を焼き払ってしまった。神の祟りを恐れた民は、僅かに残った竹を祀り、供養したという。

●三番「鳥居神社」

私達の食を支える氏神を祀る祠。氏神への感謝を示すために、巡礼者は氏神の肉とされているものを、氏神の化身である鶏の前に食します。ここで頂く氏神の肉につきましては、食堂で販売している唐揚げを購入し、カップに入れてください。また、空になったカップは今後も巡礼の上で必要となりますので、捨てないようお願いします。

●五番「穴ぼこ道」

昔々、ここは大蛇の寝床と云われ、たくさんの大きな穴が空いていました。京芸移転と同時に大半は埋め立てられましたが、マンホールで蓋をして一部だけ残されたという言い伝えがあります。

●四番「京の橋立」

天と地をかけ渡す橋を利用するために、先人たちは知恵を働かせてきた。この一把の縄は、先人がわたしたちに残した知恵の置き土産である。

